塚口遺跡

大野城市文化財調査報告書 - 第 58 集 -

2 0 0 2

大野城市教育委員会

塚口遺跡

大野城市文化財調査報告書 - 第 58 集 -

2 0 0 2

大野城市教育委員会

このたび、昭和63年度にアパート建設にともない発掘調査を実施しました塚口遺跡の発掘調査報告書を刊行することとなりました。

今回の調査では、弥生時代前期の墓地が確認され、福岡平野における該期の墓制を研究する上で非常に貴重な資料が得られました。また 甕棺墓の他にも、小刀や完形の中国製磁器を副葬した中世の墓地が確 認され、これも当時の墓制の様相を知る上で重要な資料となりました。

本報告書が今後、福岡平野内における弥生時代や中世の研究資料として活用され、また出土遺物が教育の面におきまして多くの方々に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、関係各位からご教示やご指導を賜るとともに、地権者をはじめ関係者の方々にご理解と 御協力をいただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

大野城市教育委員会教育長 堀内 貞夫

例 言

- 1. 本書は、大野城市御笠川4丁目3番12号における埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2. 調査は、昭和63年度に大野城市教育委員会が調査主体となって行われた。
- 3. 挿図中の方位は、磁北を表す。
- 4. 遺構の実測は、向直也・鹿児嶋トシ子・播磨博子・山口慶子・山崎三枝子が行った。
- 5. 遺構の写真撮影は向が行い、遺物の写真撮影は岡紀久夫が行った。
- 6. 遺物の実測は石木晴香・境聡子・松浦智が行い、製図は有田朱美・松浦が行った。
- 7. 中世の土器に関しては、山本信夫氏(太宰府市教育委員会)に鑑定をお願いし、また鉄刀実測の際、X線写真撮影は太宰府市教育委員会にご協力をいただいた。
- 8. 本遺跡の遺物・実測図・写真は大野城市教育委員会にて管理・保管されている。
- 9. 本書の執筆・編集は、松浦が行った。

<本文目次>

I. は	じめに	1
1.	調査に至る経緯	·· 1
2.	調査体制	1
Ⅱ. 位記	置と環境	2
Ⅲ.調	<u> </u>	6
1. i	貴跡の概要	. 6
2. 5	你生時代の遺構と遺物	6
(1)	甕棺墓	6
(2)	木棺墓	-10
(3)	土壙墓	13
3. 「	中世の遺構と遺物	13
	中世墓	13
4.	その他の遺構と遺物	17
	溝	17
IV. ŧ	とめ	18
1. ì	貴構の年代	18
	你生墳墓群の構成と変遷について	
3. [中世墓群の構成と変遷について	20
4.	SJ02甕棺墓について	21
	<挿図目次>	
第1図	調査地点周辺の地形図(1/5000)	
第2図	周辺の主な遺跡分布図(1/25000)	
第3図	塚口遺跡遺構配置図(1/100)	
第4図	SJ01・02・03・04甕棺墓実測図(1/20)	
第5図	SJ01・02・03・04甕棺実測図(1/8)	
第6図	SP04・08・09・10木棺墓実測図(1/30)	
第7図	S P 12・14・15木棺墓実測図(1/30)	·12
第8図	S P 05・11・13土壙墓実測図(1/30)	
第9図	SP01・02・03・06・07土壙墓実測図(1/30)	
第10図	S P 01・02・07土壙墓出土土器実測図(1/3)	
第11図	S P 07土壙墓出土鉄刀実測図(1/3)	-17

<図版目次>

図版1 ①調査区北半部全景(南西より)

②調査区南半部全景(北東より)

図版 2 ①調査区東側木棺墓・土壙墓群

検出状況(北より)

②調査区北側甕棺墓・木棺墓・

土壙墓群検出状況(南西より)

図版3 ①SJ01甕棺墓(南より)

②SJ02甕棺墓(北より)

③ S J 03甕棺墓(南より)

図版4 ①SJ04甕棺墓(南西より)

②SP04木棺墓(北より)

③SP08木棺墓(南西より)

図版 5 ① S P 09木棺墓(南より)

②S P10木棺墓(北東より)

③SP12木棺墓(北東より)

図版 6 ①SP14木棺墓(南西より)

②SP15木棺墓(南西より)

③ S P 05土壙墓(西より)

図版7 ①SP11土壙墓(北東より)

②SP13土壙墓(南西より)

③ S P 01土壙墓(南より)

図版8 ①SP02土壙墓(南東より)

②SP03土壙墓(南東より)

③SP06土壙墓(北西より)

図版 9 ① S P 07土壙墓白磁碗出土状況

(南東より)

②SP07土壙墓鉄刀出土状況

(北西より)

図版10 出土甕棺・土器・鉄刀

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

塚口遺跡は1980年福岡県教育委員会が作成した『福岡県遺跡等分布地図』には登録されていない 遺跡である。1987年(昭和62年)開発が予定されたことから埋蔵文化財試掘調査を実施したところ 発見されたものである。大野城市御笠川4丁目3番12号に当たり字名は塚口であった。

発掘調査は翌1988年(昭和63年) 5月9日から6月14日まで実施した。また、整理作業は他の事業や予算の関係から2000年(平成12年)10月から2002年(平成14年)1月に行った。

調査面積が282㎡と狭いにもかかわらず、弥生時代の土壙墓・木棺墓・甕棺墓合わせて14基、そして平安時代の土壙墓5基が検出された。

2. 調查体制

大野城市教育委員会の調査体制は以下のとおりである。

/ (2) // (10 1/ 10	XXX PUBLISH	310.221	_	_ 10) 0 0	0	
(発掘調査時、	昭和63年度)	教育县	Ī,		久野	英彦
		教育部	8長	:	助村	浩靖
		社会都	女育	課長	岡部	弥之助
		Ī	5]	課長補佐	青木	克正
		Ī	ij	主査	高橋	裕司
		Ī	1	技師	舟山	良一
		Ī	i]	技師	向	直也(調査担当)
		Ī	3	技師	徳本	洋一
		Ī	ī	嘱託	下村	精一
		Ī	<u> </u>	嘱託	秀嶋	和子

(整理作業時、平成12~13年度)

教育長		堀内	貞夫	ŧ
教育部長	Ž	青木	克正	:
教育部長	Ę	鬼塚	春光	<u> </u>
社会教育	育課長	片岡	猛	
蕳	係長	舟山	良一	-
同	技師	徳本	洋	
同	技師	石木	秀啓	*
同	技師	丸尾	博思	Ĩ.
同	技師	林	潤也	1
间	主事	大道	和貴	1
盲	嘱託	平島	義孝	ž
盲	嘱託	元吉	知于	2
同	補助員	松浦	智	(整理担当)

Ⅱ. 位置と環境

塚口遺跡は福岡県大野城市御笠川4丁目3番12号に所在する。

本遺跡は御笠川東岸にあり、三郡山地の西部にある山塊、大城山と乙金山から福岡平野東部の月 隈丘陵に向って伸びる低丘陵地上に位置する。低丘陵は多数の小谷や沢によって分化して形成され、 南西方向に向かって細長くなだらかに幾筋も伸びている。周辺遺跡はこの低丘陵地上に数多く所在 しており、以下旧石器時代から中世にかけて概観していく。

旧石器時代は大城山山麓から南西方向に派生した低丘陵上にある釜蓋原遺跡(19)・太宰府市成 選記(20)でナイフ形石器・細石刃・尖頭器などが発見されているが、包含層から出土したも のが多く、遺物・遺構数が少ないことからその詳細は不明である。

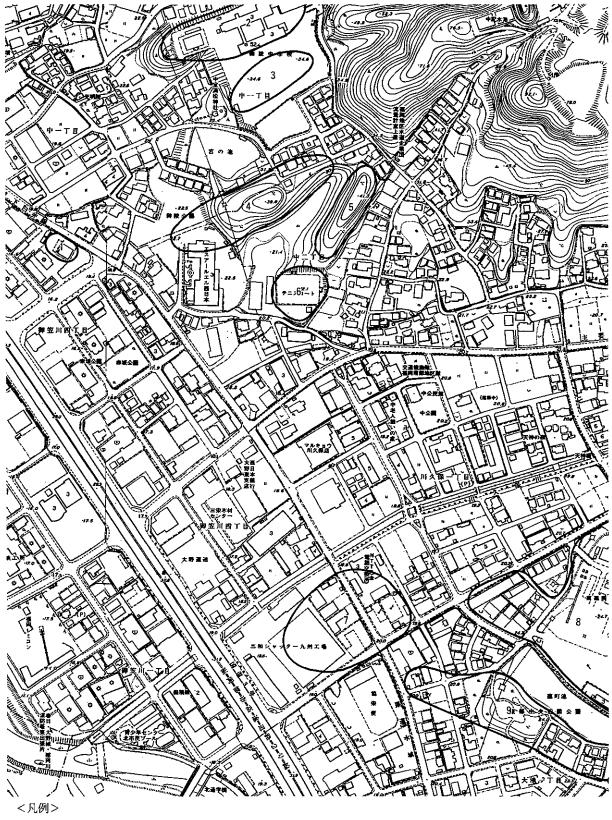
縄文時代になってもこの丘陵周辺での遺跡の分布密度は薄い。大城山と乙金山山麓の丘陵上にある釜蓋原遺跡・乙金古墳群(10)において早期の押型文土器・石鏃などが出土しているが、遺構の性格が不明なものが多く、詳細はつかめていない。

弥生時代になると稲作農耕の定着に伴い、この低丘陵地でも遺跡数が増えはじめる。御笠川東岸にある中・寺尾遺跡(7)・御陵前ノ椽遺跡(5)において、前期の墓地群が確認されている。塚口遺跡の北西方向にある月隈丘陵上には、前期の墓地遺跡である福岡市金隈遺跡(1)・下月隈天神森遺跡があり、これらの遺跡は共通して木棺墓・土壙墓と甕棺墓がそれぞれ墓群を形成し、混在する特徴を持つ。それに対し前期の集落遺跡に関しては、大野城市内においてまだ確認されていない。中期になると御笠川西岸にある村下遺跡(24)では集落が前半段階から後期前半にかけて形成され、それに続いて仲島遺跡(21)、また御笠川東岸にある森園遺跡(8)でも中期中葉から末にかけて営まれている。中期の墓地遺跡に関しては森園遺跡・石勺遺跡(25)において中期中葉から後半にかけて甕棺墓を主体に木棺墓・土壙墓・石棺墓の造営が行なわれ、森園遺跡では墓地の小児用甕棺墓棺内から碧玉製の管玉57個が出土した。後期にはいると集落は確認されていないが、榎町遺跡(15)において溝から土器や石庖丁が出土している。

古墳時代になると乙金山山麓から月限丘陵にかけて、前期に御陵古墳群(4)が造営されはじめ、中期には持田ケ浦古墳群(2)、後期になると乙金古墳群が造営される。この3つの古墳群の小円墳・方墳の総数は合計約300基を数える。また御笠川の西岸にある原ノ畑遺跡(27)・仲島遺跡では前期の集落が確認されている。仲島遺跡では集落が後期まで引き続き営まれ、後期の大溝の中からほぼ完形に近い移動式竈が出土し、市指定有形文化財に指定されている。

歴史時代になると、御笠川の西岸にある御笠ノ森遺跡(23)において8世紀から9世紀の竪穴式住居・掘立柱建物の集落が確認されるが、10・11世紀にかけての遺跡はほとんど確認されていない。12世紀になると墓地・集落遺跡が確認され、その分布は御笠川東岸の低丘陵地に集中している。森園遺跡において土壙墓3基、中・西コモリ遺跡では土壙墓1基が検出され、各々の墓壙から中国製磁器碗・土師器小皿・鉄刀などの豊富な副葬品が出土している。また集落遺跡は薬師ノ森遺跡(14)において確認されている。

- 註1 向直也『釜蓋原遺跡』大野城市文化財調查報告書第25集(1988)大野城市教育委員会
- 註2 酒井仁夫他『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XVI』(1977) 福岡県教育委員会
- 註 3 舟山良一他『乙金古墳群―北支群―』大野城市文化財調査報告書第11集(1984)大野城市教育委員会
- 註 4 浜田信也他『中・寺尾遺跡』大野町の文化財第 3 集(1971) 大野町教育委員会 馬田弘稔他『中・寺尾遺跡』大野城市文化財調査報告書第 1 集(1977) 大野城市教育委員会
- 註5 向直也他『御陵前ノ椽遺跡』大野城市文化財調査報告書第48集(1997)大野城市教育委員会
- 註6 『金隈遺跡1、2次調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書(1970、1971)福岡市教育委員会
- 註7 松村道博他『下月隈天神森遺跡皿』福岡市埋蔵文化財調査報告書第457集(1996)福岡市教育委員会
- 註8 『大野城市の文化財』第22集(1989) 大野城市教育委員会
- 註9 『仲島遺跡 I~XI』大野城市文化財調査報告書(1980~1993)大野城市教育委員会
- 註10 向直也『森園遺跡 I 、Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第26·55集(1988、1999) 大野城市教育委員会
- 註11 『石勺遺跡 I ~IV』大野城市文化財調査報告書第47・50・52・56集(1996~1999)大野城市教育委員会
- 註12 『大野城市の文化財』第26集(1994)大野城市教育委員会
- 註13 舟山良一他『御陵古墳群』大野城市文化財調査報告書第13集(1984)大野城市教育委員会
- 註14 舟山良一『持田ケ浦古墳群』大野城市文化財調査報告書第19集(1987)大野城市教育委員会
- 註15 舟山良一『瑞穂・原ノ畑遺跡』大野城市文化財調査報告書第57集(2001)大野城市教育委員会
- 註16 浜田信也『御笠ノ森遺跡』福岡県文化財調査報告書第88集(1989)福岡県教育委員会
- 註17 副島邦弘他『中・西コモリ遺跡』大野城市文化財調査報告書第2集(1978)大野城市教育委員会 中・西コモリ遺跡は上記報告書に調査箇所の地番と周辺の地図が記載されていないため、調査箇所が現在 のどこに当たるのか不明であるが、本来森園遺跡の範囲内にある遺跡ではないかと考えられている。



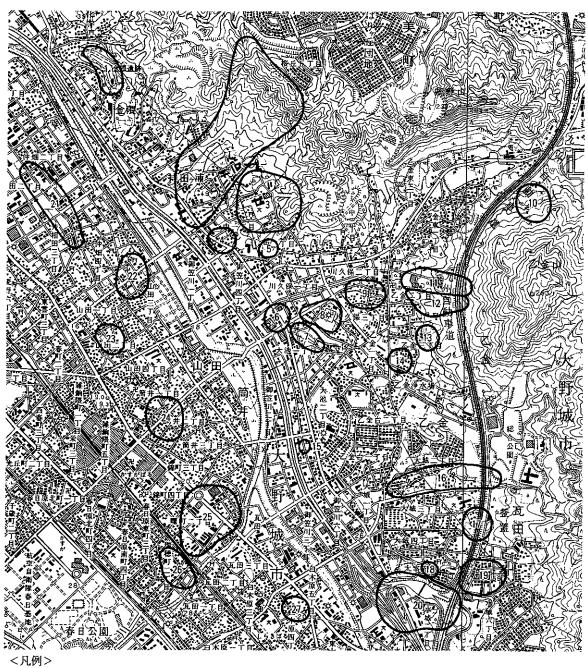
1. 塚口遺跡

- 2. 御陵古墳群北支群 3. 御陵古墳群南支群 4. 御陵古墳群 5. 御陵古墳群

6. 御陵前ノ椽遺跡 7. ヒケシマ遺跡 8. 森園遺跡

9. 中·寺尾遺跡

第1図 調査地点周辺の地形図 (1/5000)



1.	金隈遺跡	2.	持田ヶ浦古墳群	3.	御陵古墳群	4.	塚口遺跡	5.	御陵前ノ椽遺跡
6.	ヒケシマ遺跡	7.	中•寺尾遺跡	8.	森園遺跡	9.	松葉園遺跡	10.	乙金古墳群
11.	王城山古墳群	12.	古野古墳群	13.	花園遺跡	14.	薬師ノ森遺跡	15.	榎町遺跡
16.	雉子ヶ尾遺跡群	17.	中ノ原遺跡	18.	笹原古墳	19.	釜蓋原遺跡	20.	成屋形遺跡
21.	仲島遺跡	22.	川原遺跡	23.	御笠ノ森遺跡	24.	村下遺跡	25.	石勺遺跡

26. 瑞穂遺跡 27. 原ノ畑遺跡

第2図 周辺の主な遺跡分布図(1/25000)

Ⅲ.調査の成果

1. 遺跡の概要

今回の調査で検出された遺構は弥生時代の甕棺墓4基・木棺墓7基・土壙墓3基、中世の土壙墓5基、時期不明の溝3本である。大破している甕棺の残存状態や確認面から床面までの深さが浅い木棺墓・土壙墓の状況から、全面的にだいぶ削平を受けているようである。出土遺物は、弥生時代の木棺墓・土壙墓から土器の小破片がわずかに出土したのに対し、中世の土壙墓からは須恵器のこね鉢・白磁碗・鉄刀など数種の副葬品が出土している。

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 甕棺墓

甕棺墓は調査区の北側に集中して分布し、成人棺1基・小児棺3基の計4基が検出された。どの 甕棺墓も削平を受けており、特にSJ01・02甕棺墓は著しく受け、棺の残存状態は悪い。また棺内 から遺物は出土していない。

S J01甕棺墓(第4図、図版3)

S J 02甕棺墓・S P 04木棺墓・S P 05土壙墓に囲まれて検出した小児用甕棺墓である。甕棺は削平を著しく受けて大破しており、上甕の有無は不明である。甕棺本体の残存率は1/10弱であり、胴部が一部残っている程度である。墓壙も削平を受けて大破しており、残された墓壙の形態は正円形に近い楕円形プランを呈す。墓壙規模は長さ $45\,\mathrm{cm}$ 、幅 $39\,\mathrm{cm}$ で深さ $12\,\mathrm{cm}$ を測る。主軸方位は N -57° - W にとる。

S J 01甕棺(第5図)

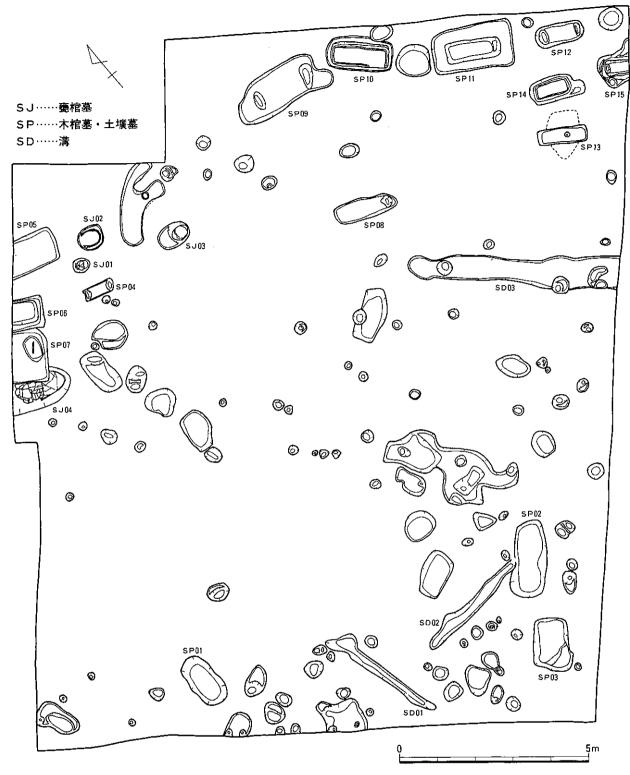
1は胴部の一部で、口縁部・底部を欠く。調整は器面の摩滅が著しく不明である。胎土は径 3 mm 程の砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は外面が黄褐色、内面は浅黄色を呈す。

S J02甕棺墓(第4図、図版3)

SJ01甕棺墓の北側に隣接して検出した甕棺墓である。削平を著しく受け、墓壙・甕棺ともに大破している。現状での墓壙形態は楕円形プランを呈し、長さ69cm、幅64cmで深さ12cmを測り、床面の中央はやや深くなっている。甕棺は単棺であるが、その出土状況は他の甕棺墓と比べると特異である。甕棺は甕本体を口縁部から底部付近にかけてタテ方向に半截している。墓壙にはその半截面を下にして、遺体を覆い被せるようにほぼ水平に置かれていた。甕棺は成人用甕棺であるが、墓壙の規模から判断すると小児用である。甕棺本体の残存率は1/6程で、主軸方位は N -70° - W にとる。

S J 02甕棺(第5図)

2は図示可能なものが口縁部のみで、復元口径55.0cmを測る。形態は外反した口縁の内外、両側に粘土帯を貼り付け肥厚している。調整は口縁から胴部にかけて外面にハケメがタテ方向に残り、

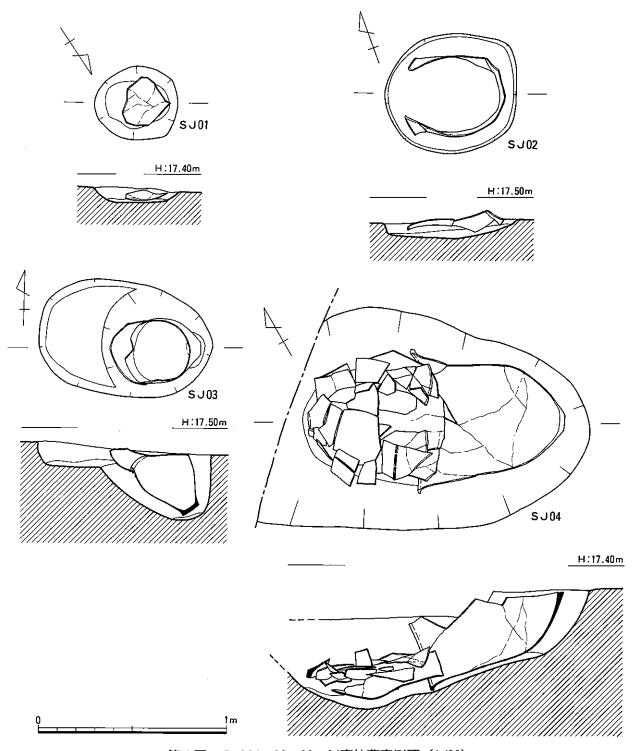


第3図 塚口遺跡遺構配置図(1/100)

胴部の上位には2条の沈線が施される。焼成はやや軟質で、色調は内外ともにぶい黄褐色を呈す。

S J 03甕棺墓(第4図、図版3)

S J 02甕棺墓の東側に隣接して検出した接口式の小児用甕棺墓である。上甕は削平を著しく受け口縁部、胴部の一部が残るのみであり、それに対し下甕は口縁部を一部欠くが、残りが非常に良く、

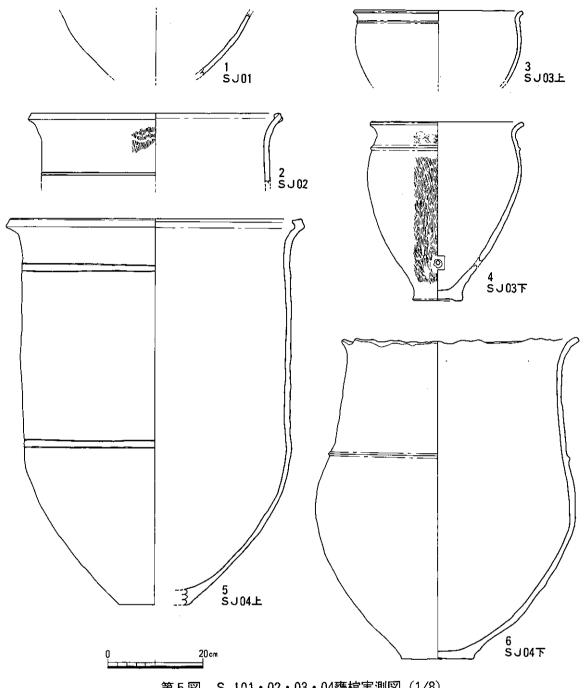


第4図 SJ01・02・03・04甕棺墓実測図(1/20)

甕棺の本体残存率は2/3程である。墓壙形態は楕円形プランを呈し、規模は長さ88cm、幅61cmで深さ42cmを測る。墓壙の掘り込みは二段掘り込みで、一度掘り込んだ後、さらに東隅を30cm程掘り下げ、そこに棺を据えている。主軸方位は N -89° – E にとる。埋葬傾斜角度は 52° である。

S J03甕棺(第5図、図版10)

上甕 3は削平を大きく受けており、甕の残存率は1/4程である。復元口径36.0㎝を測る。口縁は如



第5図 SJ01・02・03・04甕棺実測図(1/8)

意形を呈し、口縁下に三角凸帯を1条貼り付けている。調整は口縁付近でヨコナデが施されている が、胴部は内外とも摩滅が著しく不明である。胎土は3㎜内外の砂粒を多く含む。焼成は良好で、 色調は外面がにぶい黄褐色、内面は橙色を呈す。

下甕 4は口縁部を一部欠くが、ほぼ完形品である。口径32.6cm、底径10.5cm、器高37.9cmを測る。 口縁は如意形を呈し、口縁下に三角凸帯を1条貼り付け、底部は若干上げ底になっている。調整は 外面の口縁付近にハケメと指圧痕、胴部外面にハケメが顕著に残り、胴部下半には径2cm弱の円形 状の穿孔が見られる。胎土は径3mm以下大の砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は外面が橙色、 内面はにぶい黄褐色を呈す。外面に径10cm大の黒斑があり、薄く残っている。

S J 04甕棺墓(第 4 図、図版 4)

S P07土壙墓に切られる覆口式の成人用甕棺墓である。上甕は削平、下甕は土圧によって大破しており、甕棺本体の残存率は1/2程である。下甕の口縁部はほぼ全周打ち欠いており、上甕を被せやすいようにしている。墓壙形態は一部調査区外にかかっているが、残された墓壙から隅丸長方形プランを呈し、長さは推定で約 $200\,\mathrm{cm}$ 、幅 $118\,\mathrm{cm}$ で深さ $65\,\mathrm{cm}$ を測る。主軸方位は N $-64\,^{\circ}$ - W にとる。埋葬傾斜角度は $21\,^{\circ}$ である

S J 04甕棺(第5図、図版10)

上甕 5は残存率が3/4程で、残りが良い。口径63.2cm、底径14.4cm、器高82.0cmを測る。口縁部は外反し、口縁の内側に粘土帯を貼り付け、平坦面をなし肥厚している。調整は器面の摩滅が著しく不明であるが、口縁下と胴部に沈線が1条ずつ施されている。胎土は径3mm以下大の砂粒、金雲母を含む。焼成は良好で、色調は内外ともに橙色を呈す。胴部外面に径20cm大の黒斑が残る。

下甕 6 は残存率が3/4程で、口径49.0cm、底径15.2cm、器高68.2cmを測る。壺の形態の名残りを残した甕の口縁は外反し、胴部最大径は上位にある。肩部には三角凸帯を1条貼り付けている。調整は器面の摩滅が著しく、口縁付近にヨコナデの痕跡が部分的に残る。胎土は径3 mm内外の砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、色調は内外面ともにぶい黄褐色を呈す。胴部外面には径20cm大の黒斑が楕円形状に色濃く残る。

(2)木棺墓

木棺墓は調査区の北側で1基、東側で6基の計7基が検出された。またその分布に関しては隣接する弥生時代の土壙墓3基を含め、調査区の東側から北側にかけて集中しており、一つの墓群を形成している。遺物は弥生土器片がSP04・09・10・15木棺墓で出土しているが、図示可能なものはない。

S P 04木棺墓(第 6 図、図版 4)

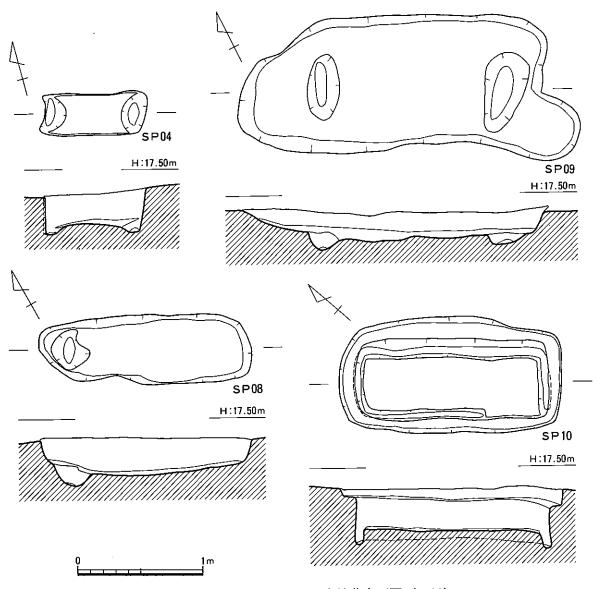
調査区の北側で、SJ01甕棺墓の南側に隣接して検出された一段掘り込みの小児用木棺墓である。 墓壙形態は長方形プランを呈し、規模は長さ81cm、幅33cmで深さ25cmを測り、側壁は垂直に立ち上 がる。さらに床面の両短辺部には小口板を入れる深さ8cm程の掘り込みがある。床面はほぼ水平で、 主軸方位は $N-75^{\circ}-W$ にとる。

SP08木棺墓(第6図、図版4)

S D03の北側に隣接して検出された一段掘り込みの木棺墓である。墓壙形態は隅丸長方形プランを呈し、規模は長さ169㎝、幅56㎝で深さ30㎝を測る。床面の東側短辺部には小口板を入れる深さ13㎝の掘り込みがある。床面はほぼ水平で、主軸方位は N-63°-W にとる。

S P 09木棺墓(第6図、図版5)

SP10木棺墓の西側に隣接して検出された一段掘り込みの木棺墓である。墓壙形態は隅丸長方形

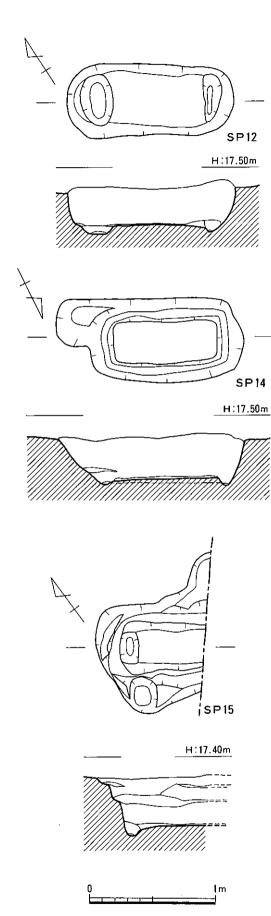


第6図 SP04・08・09・10木棺墓実測図 (1/30)

プランを呈す。規模は長さ239cm、幅103cmで深さ22cmを測り、本遺跡の木棺墓群の中で最大の規模を誇る。東側には楕円形プランの別区を設けているが、そこから遺物は出土していない。床面の両短辺部には小口板を入れる深さ10cm程の掘り込みがある。床面はほぼ水平で、主軸方位はN-68° - W にとる。

SP10木棺墓(第6図、図版5)

SP09木棺墓・SP11土壙墓に挟まれて検出された二段掘り込みの木棺墓である。墓壙形態は一段目の掘り込みが隅丸長方形プランを呈し、規模は長さ177cm、幅92cmで深さ15cmを測る。二段目の掘り込みは隅丸長方形プランを呈し、規模は長さ155cm、幅55cm、深さ26cmを測り、側壁は垂直に立ち上がっている。さらに床面には両小口板・両側板を入れる深さ10cm弱の掘り込みがあり、棺の内法は長さ150cm、幅52cmを測る。床面は西側がやや高く、主軸方位は N -43° - W にとる。



第7図 SP12・14・15木棺墓実測図(1/30)

SP12木棺墓(第7図、図版5)

SP14・15木棺墓・SP11土壙墓に囲まれて 検出された一段掘り込みの小児用木棺墓である。 墓壙形態は隅丸長方形プランを呈し、規模は長 さ132cm、幅59cmで深さ30cmを測り、側壁はやや 斜めに立ち上がっている。床面の両短辺部に小 口板を入れる深さ10cm程の掘り込みがある。床 面はほぼ水平で、主軸方位は N -61° - W に とる。

SP14木棺墓(第7図、図版6)

SP12・15木棺墓・SP13土壙墓に囲まれて 検出された一段掘り込みの小児用木棺墓である。 墓壙形態は隅丸長方形プランを呈し、規模は長 さ145cm、幅66cmで深さ32cmを測る。床面には 両小口板・両側板を入れる深さ5cm程の掘り込 みがあり、棺の内法は長さ101cm、幅50cmを測る。 側壁はやや斜めに立ち上がっている。床面はほ ぼ水平で、主軸方位はN-65°-Wにとる。

SP15木棺墓(第7図、図版6)

SP14木棺墓の東側に隣接して検出された二段掘り込みの木棺墓である。掘り方は、一段目の掘り込みに浅い不定形の段が部分的に確認されているが、これを一段の掘り込みとして捉えていいのか判別が難しいので、ここでは二段掘り込みとして紹介する。一部調査区外にかかるが、墓壙の残りから一段目の掘り込みの形態は不整楕円形プランを呈す。規模は長さが不明であるが、幅80cmで深さ10cmを測る。二段目の掘り込みは隅丸長方形プランを呈し、規模は幅39cm、深さ18cmを測る。さらに床面の北側短辺部には深さ10cm程の小口板の掘り込みがある。主軸方位は $N-54^\circ$ — W にとる。

(3) 土壙墓

土壙墓は調査区の北側で1基・東側では2基の計3基が検出された。周りに木棺墓が集中して分布することから、これらの土壙墓の中には小口板・側板の掘り込みを設けない木棺墓である可能性が考えられる。しかし判断が難しいのでここでは土壙墓として紹介する。またSP05・13土壙墓で弥生土器片が出土しているが、図示可能なものはない。

SP05土壙墓(第8図、図版6)

調査区の北側で、S J 02 整棺墓の西側に隣接して検出された一段掘り込みの土壙墓である。一部調査区外にかかっているが、墓壙の残りから形態は隅丸長方形プランを呈しているようである。規模は長さが不明であるが、幅95cmで深さ23cmを測る。床面はほぼ水平で、主軸方位は N -70° - W にとる。

SP11土壙墓(第8図、図版7)

調査区の東側で、SP10・12木棺墓に挟まれて検出された二段掘り込みの土壙墓である。一段目の掘り込みは、墓壙形態が整然とした長方形プランを呈し、規模は長さ217cm、幅120cm、深さ17cmを測る。二段目の掘り込みは長方形プランを呈し、規模は長さ145cm、幅54cmで深さ58cmを測り、壁もほぼ垂直に立ち上がる。床面は東側がやや高く、主軸方位はN-62°-Wにとる。

SP13土壙墓(第8図、図版7)

調査区の東側で、SP14木棺墓の南側に隣接して検出された一段掘り込みの土壙墓である。上面は撹乱により削平されている。墓壙形態は整然とした長方形プランを呈し、規模は長さ134cm、幅45 cmで深さ37cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は東側がやや高く、主軸方位はN-54°-Wにとる。

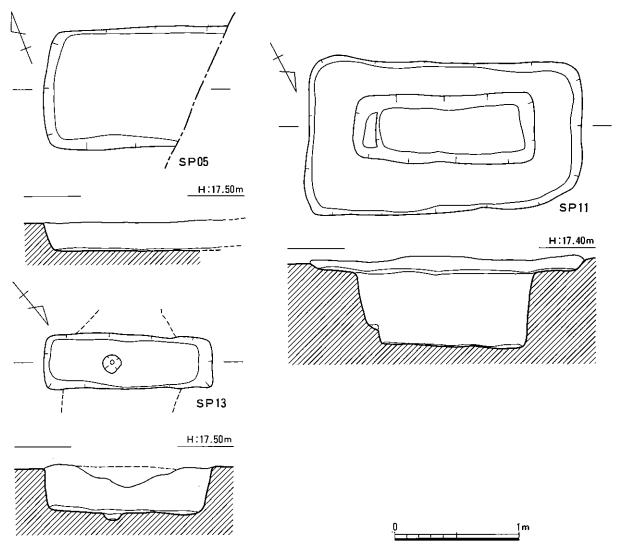
3. 中世の遺構と遺物

土壙墓

調査区の北側で2基・南側で2基・西側で1基の計5基が検出された。この中には木棺墓の可能性が考えられるものもあるが、床面で小口板・側板の掘り込みが確認できなかったので、ここでは土壙墓として紹介する。中世墓は、墓群を形成している弥生時代の甕棺墓・木棺墓・土壙墓と比べると、群集することはなく単独あるいは2基の少数規模で造営されている。

SP01土壙墓(第9図、図版7)

調査区の西側で検出された一段掘り込みの土壙墓である。墓壙形態は楕円形プランを呈し、規模は長さ148cm、幅79cmで深さ12cmを測る。床面は北側がやや高く、主軸方位は N - 5° - E にとる。遺物は須恵器のこね鉢、土師器小皿片が出土した。



第8図 SP05・11・13土壙墓実測図(1/30)

SP01土壙墓出土土器(第10図)

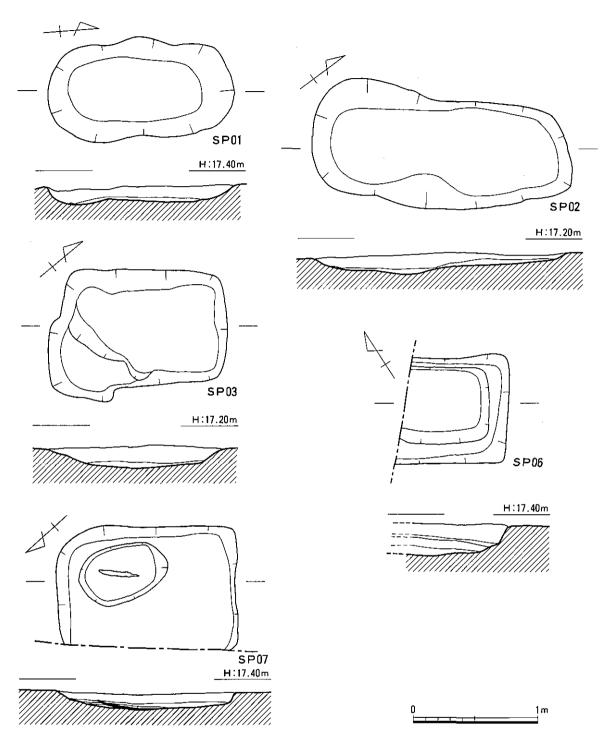
7は須恵器のこね鉢片である。残存率は1/6で口縁部と胴部の一部が残る。口径は復元で29.8cmを 測り、口縁の形態は扁平な玉縁状を呈す。胎土は精良で、径2mm以下の砂粒を少量含む。焼成は軟 質で、色調は内外面ともに灰白色を呈す。8は土師器小皿の底部である。底径は6.6cmを測り、底部 外面には回転糸切りの調整が残る。胎土は精良で、径2mm以下大の小砂粒を少量含む。焼成は良好 で、色調は内外ともに橙色を呈す。

SP02土壙墓(第9図、図版8)

調査区の北側で、SP03土壙墓の西側に隣接して検出された一段掘り込みの土壙墓である。SD02に切られる。墓壙形態は隅丸長方形プランを呈し、規模は長さ203cm、幅86cmで深さ15cmを測る。 床面は北側がやや高く、主軸方位はN-52°-Wにとる。遺物は土師器椀が出土した。

SP02土壙墓出土土器(第10図、図版10)

9は土師器の椀である。残存率は1/3で、復元口径13.4cm、底径7.2cm、器高4.8cmを測る。形態

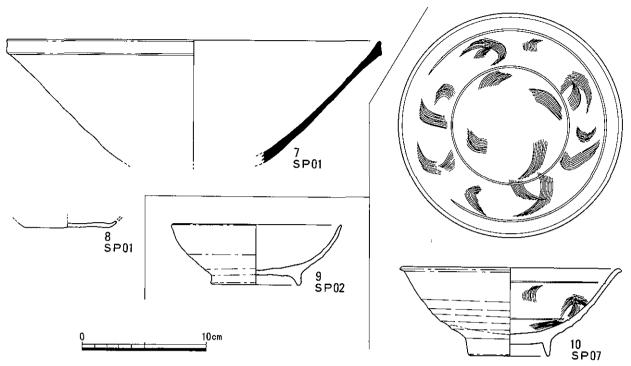


第9図 SP01・02・03・06・07土壙墓実測図(1/30)

は口縁端部がわずかに外反し、胴部は内湾しながら立ち上がる。また高台は低く、端部は丸みを持っ。器面の調整は摩滅が著しく、不明である。胎土は精良で、金雲母を若干含む。焼成は良好で、 色調は外面が浅黄褐色、内面がにぶい黄褐色を呈す。

SP03土壙墓(第9図、図版8)

調査区の南側で、SP02土壙墓に隣接して検出された一段掘り込みの土壙墓である。墓壙形態は



第10図 SP01・02・07土壙墓出土土器実測図(1/3)

隅丸長方形プランを呈している。さらに南側に隅丸正方形プランの別区を設け、土壙墓本体の床面より一段高くなる。規模は長さ140cm、幅94cmで深さ18cmを測る。床面はほぼ水平で、主軸方位は N-41°-W にとる。

SP06土壙墓(第9図、図版8)

調査区の西側で、SP07土壙墓に切られて検出された二段掘り込みの土壙墓である。一部調査区外にかかるが、残りの墓壙から一段目の掘り込みは長方形プランを呈し、規模は長さが不明であるが、幅84cmで深さ18cmを測る。二段掘り込みは長方形プランを呈し、幅52cm、深さ13cmを測る。主軸方位は $N-57^{\circ}-W$ にとる。

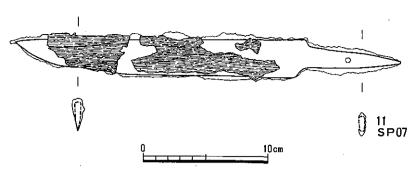
SP07土壙墓(第9図、図版9)

調査区の西側で、SJ04甕棺墓・SP06土壙墓に挟まれて検出された一段掘り込みの土壙墓である。切り合い関係はSP06土壙墓に切られ、SJ04甕棺墓を切ることから、造営時期の古い順にSJ04甕棺墓・SP07土壙墓・SP06土壙墓となる。一部調査区外にかかるが、墓壙の残りから形態は隅丸長方形プランを呈し、規模は長さ142cm、幅は約100cmが想定され、深さ18cmを測る。床面の北東側では、鉄刀が鋒を北側に向けて置かれ、また試掘の際に取り上げてしまったが白磁碗が北西側の床面直上で確認されていることから、頭位は北側であったと考えられる。床面はほぼ水平で、主軸方位は $N-50^\circ-W$ にとる。

SP07土壙墓出土土器(第10図、図版10)

10は完形品の白磁碗である。法量は口径17.8cm、底径6.5cm、器高7.0cmを測る。胴部から口縁部にかけて内湾しながら立ちあがり、口縁端部はゆるやかではあるが、若干尖っている。内面には10

本/1cm単位の細かい 櫛目で花文を描き、その 上下には沈線が1条ずつ 施されている。口縁、胴 部の内外面には乳白色の 釉がかかり、釉のかから ない底部は浅黄色を呈し ている。胎土は良く精製



第11図 SP07土壙墓出土鉄刀実測図(1/3)

されており、焼成は良好である。

SP07土壙墓出土鉄刀(第11図、図版10)

残存長30.5cm、最大幅3.1cm、厚さは最大で0.6cmを測る。刀身の部分には木質片が部分的に付着しており、木製鞘を装着したまま、副葬品として用いたようである。茎には径0.4cmの目釘孔がある。

3. その他の遺構と遺物

潚

調査区の南側で2本、東側で1本の計3本が検出された。3本の溝とも確認面から床面までの深さが10cmを超えるものがないことから、少なからず削平を受けているようである。溝からの出土遺物はない。

SD01 (第3図)

調査区の南側に位置し、南北方向に伸びる溝である。調査区内の規模は長さ約340cm、幅は最大で50cm、確認面からの床面までの深さは最深で8cmを測る。

SD02(第3図)

調査区の南側に位置し、SP02土壙墓を切る溝で東西方向に伸びる。調査区内での規模は長さ約320cm、幅は最大で48cm、確認面から床面までの深さは最深で7cmを測る。

SD03(第3図)

調査区の東側に位置し、南北方向に伸びる溝である。溝の東側は調査区外にかかり、調査区内での規模は長さ約520cm、幅は最大で82cm、確認面からの深さは最深で9cmを測る。

Ⅳ. まとめ

1. 遺構の年代

(1) 弥生時代についての遺構

今回の調査で甕棺墓・木棺墓・土壙墓が検出されているが、木棺墓・土壙墓から造営時期のわかる遺物は出土しておらず、時期を明らかにできるものはSJ02・03・04甕棺墓がある。

- S J02 口縁部の形態から金海式古段階のもので、前期後半から末にかけての年代が考えられる。
- S J 03 上甕は深鉢、下甕は甕であるが、ともに口縁は如意形を呈し、口縁下に凸帯を持つ板付Ⅱ b 式で、前期後半にあたる。
- S J04 上甕は甕で、下甕は壺の名残りを残しているが、ともに口縁部の特徴から、金海式古段階 のもので、前期後半から末にかけての年代が考えられる。

(2) 中世の土壙墓

出土遺物で土壙墓の時期を明らかにできるものは、SP01・02・07土壙墓がある。

- SP01 出土遺物は須恵器のこね鉢、土師器小皿がある。そのうちこね鉢は東播系の土器で、口縁の特徴から12世紀後半頃の年代が考えられる。しかし出土状況を確認できなかったので12世紀後半から13世紀代としたい。
- SP02 出土した土師器椀の胴部・高台部の特徴から、中島編年の土師器・椀皿-1形式に類似しており、10世紀前半頃の年代であるが、出土状況を確認できなかったので10世紀代としたい。
- SP07 床面の直上から白磁碗と鉄刀が出土している。そのうち白磁碗は、口縁端部の特徴から、 (基3) 山本編年のV-4b 類に類似し、造営時期は12世紀中頃から後半にかけての年代が考え られる。

またSP03土壙墓はSP02土壙墓の南側に隣接しており、主軸方位も類似することからSP02土 壙墓と同時期、もしくはそれに前後する時期が考えられる。SP06土壙墓は、SP07土壙墓を切る 遺構であり、主軸方位がSP07土壙墓と全く異なることから、13世紀以降の年代が考えられる。

(3) 溝

3本の溝が検出されているが、出土遺物が全くなく、時期を明らかにできるものはない。ただし S D02は S P02土壙墓を切っており、S P02土壙墓よりも新しい時期、つまり11世紀以降の年代が 考えられる。

2. 弥生墳墓群の構成と変遷について

今回の調査で弥生時代の遺構は、甕棺墓・木棺墓・土壙墓が検出されているが、前述したように木棺墓・土壙墓から造営時期のわかる遺物は出土しておらず、時期のわかるものは前期後半から末にかけての甕棺墓3基だけである。はじめに本遺跡の弥生墳墓群の構成については、今回の調査成果をもとに考察していきたい。また変遷については木棺墓・土壙墓の造営時期がわからないので、甕棺墓の年代からこの時期の周辺遺跡で、木棺墓・土壙墓と甕棺墓から構成される墳墓群を形成した中・寺尾遺跡・金隈遺跡・下月隈天神森遺跡の調査例と比較しながら考えていきたい。

まず本遺跡では 4 基の甕棺墓が調査区の北側でまとまって確認され、どの甕棺墓も主軸方位・造営時期がほぼ同じであることから、一つの墓群を形成していると捉えることができ、集団墓であると考えられる。また木棺墓・土壙墓 9 基に関しては調査区の東側から北側にかけてまとまって確認され、時期のわかる遺物は出土していないが、 9 基とも主軸方位が $N-43^{\circ}-W$ から $N-75^{\circ}-W$ の範囲でほぼ同じ方位をとっていることから、造営時期がほぼ同時期の墓群を形成していると捉えることができ、集団墓であると考えられる。また甕棺墓と木棺墓・土壙墓の切り合い関係は確認されておらず、両墓群の造営時期の前後関係は不明であるが、両墓群の配置状況を合わせて見てみると、 $3\sim4$ m 幅で東西方向に伸びる列状に墓群を形成しているように見える。

次に墳墓群の変遷についてであるが、まず同低丘陵上に所在する周辺遺跡の中・寺尾遺跡や金隈 遺跡・下月隈天神森遺跡の墳墓群の例を参照したい。中・寺尾遺跡は大野城市大字中に所在し、塚 口遺跡の南東0.8km離れた所にある遺跡である。2次調査では板付IIb式主体の小壺が副葬品として 出土した木棺墓・土壙墓19基と橋口編年KIb式主体の甕棺墓27基がそれぞれ墓群を形成し、混在 している。切り合い関係は小児用甕棺墓4基が土壙墓を切っているが、成人用甕棺墓と木棺墓・土 **壙墓は重複せず、おたがいに主軸方位はほぼ同一方向を向いている。このことからこの遺跡では墳** 墓群の形成に関して、木棺墓・土壙墓群の形成が先行し、やや遅れて甕棺墓群が形成されたか、あ るいは同時に両墓群が形成されたか、両方の可能性が考えられる。金隈遺跡は福岡市博多区金隈に 所在し、塚口遺跡の北西1.2km離れた所にある遺跡である。月隈丘陵の尾根上に119基の木棺墓・土 坊墓、367基の甕棺墓がそれぞれ幾つかの墓群を形成し、混在している。木棺墓・土壙墓から遺物が ほとんど出土していないので、造営時期については明らかではないが、甕棺墓が木棺墓・土壙墓を 切るケースが多く、木棺墓・土壙墓群が先行して形成され、甕棺墓群がやや遅れて形成されたよう である。下月隈天神森遺跡は福岡市博多区下月隈に所在し、塚口遺跡の北西2.8km離れた月隈丘陵上 にある遺跡である。板付 I・ II 式の小壺が副葬品として出土した木棺墓・土壙墓34基とK I a~K I c式の甕棺墓41基がそれぞれ墓群を形成し、混在する遺跡である。出土遺物・切り合い関係から木棺 墓・土壙墓群の形成が先行し、遅れて甕棺墓群が周辺に接するように形成されている。このように 弥生時代前期後半から末においての福岡平野部の木棺墓・土壙墓群と甕棺墓群が混在する墓地遺跡 では、木棺墓・土壙墓群が先行して形成され、甕棺墓群がそれに接するような形で遅れて形成され る例が多い。しかし塚口遺跡の場合は中・寺尾遺跡と同様に、両墓群の主軸方位はほぼ同一方向を 向いているが、甕棺墓と木棺墓・土壙墓の重複関係が不明なので、木棺墓・土壙墓群が先行して形 成され、やや遅れる形で甕棺墓群が形成されていったとは判断できず、同時に両墓群が形成されて

いった可能性も考慮した方がいいだろう。

3. 中世墓群の構成と変遷について

今回の調査で中世墓は調査区の北側で2基・南側で2基・西側で1基の計5基検出された。その 造営時期に関しては出土遺物・棺の検出位置・主軸方位や遺構の切り合い関係などから次の3期に わたって埋葬が行なわれていたと考えられる。

第1期

10世紀代の時期で、出土遺物から調査区南側のSP02土壙墓が該当する。またSP03土壙墓は棺内から遺物は出土していないが、同じ調査区南側でSP02土壙墓の南側に隣接して検出され、棺の主軸方位も同じ方向を向いていることから、SP02土壙墓と同時期、もしくはそれに前後する時期に造営されたと考えられる。

第2期

12世紀中頃から13世紀にかけての時期で、出土遺物から調査区西側のSP01土壙墓、調査区北側のSP07土壙墓が該当する。検出位置は若干離れているが、主軸方位はほぼ同じで、頭位が北側となっている。しかし墓群を形成せず、墓は単独で造営されている。

第3期

13世紀以降の時期で、SP06土壙墓がこれに該当する。遺物は出土していないが、SP07土壙墓を切っていることから、SP06土壙墓はSP07土壙墓造営後につくられた遺跡中一番新しい墓である。また主軸方位も東西方向を向き、他の土壙墓の様相と異なる。

以上のように本遺跡の中世墓は3期にわたって造営されている。次に大野城市では第2期とほぼ 同時期に造営された中世墓が森園遺跡で3基、中・西コモリ遺跡で1基確認されており、ここで参 照したい。

森園遺跡は塚口遺跡から南西0.8 kmにある遺跡で、1次調査において3基の小児用土壙墓が検出されている。B-SP01はIV地点の北側で検出され、墓壙形態は隅丸長方形プランを呈し、墓壙規模は長さ140cm、幅75cmで深さ15cmを測る。床面はほぼ水平で、主軸方位はN-28°-Eにとる。出土遺物は白磁碗1・青磁碗1・土師器小皿2・鉄刀1が出土し、鉄刀は鋒を北側に向けている。そのうち白磁碗は山本編年V-1a類に類似し、造営時期は12世紀前半頃の年代が考えられる。B-SP02はVI地点の中央部で北側にB-SP03が隣接して検出され、墓壙形態は方形プランを呈し、墓壙規模は長さ90cm、幅89cm、深さ10cmを測る。床面は北側がやや高く、主軸方位はN-29°-Eにとる。出土遺物は鉄刀が1つ出土し、刃先を北側に向けている。B-SP03はVI地点の中央部で検出され、墓壙形態は隅丸長方形プランを呈し、墓壙規模は長さ150cm、幅85cmで深さ15cmを測る。床面はほぼ水平で、主軸方位はN-49°-Eにとる。出土遺物は白磁碗1・土師器皿1・土師器小皿4が出土した。そのうち白磁碗はB-SP01と同じく山本編年V-1a類に類似し、造営時期は12世紀前半頃と考えられる。

中・西コモリ遺跡は森園遺跡の範囲内に所在すると考えられている遺跡で、第4トレンチから小 児用木棺墓が1基確認されている。墓壙形態は隅丸長方形プランを呈し、墓壙規模は長さ115cm、幅 67cmで深さ22cmを測る。小口板・側板の掘り込みが確認されていて、床面はほぼ水平である。主軸 方位は N-65°-Wにとる。出土遺物は側板の掘り込みの中から白磁碗1・土師器小皿1が出土 している。白磁碗は山本編年V-4類に類似し、造営時期は塚口遺跡とほぼ同じ時期と考えられる。 以上のことから、大野城市内では12世紀代から13世紀にかけての木棺墓・土壙墓が、塚口遺跡の 調査例を含め6基確認されており、遺構数は少ないが幾つかの共通点を見出すことができる。まず 遺跡の分布であるが塚口遺跡を含めた3遺跡は、ともに御笠川東岸の低丘陵地に所在し、遺跡自体 が隣接しているということである。次に墓の構成については、森園遺跡では2基が隣接して造営さ れていたが、他の4基は単独で埋葬されている。太宰府市内でも12世紀から13世紀にかけての木棺 墓・土壙墓が19基確認されているが、単独、もしくは2基が隣接して埋葬されているものが多く、 この地域の12世紀から13世紀にかけての墓は、基本的に群集しないのが一般的であったようである。 また副葬品については中国製磁器碗・土師器小皿・鉄刀のうち、どれか1つ、もしくは2つを組み 合わせて用いており、太宰府市内の木棺墓・土壙墓の場合では、埋葬品はどれも中国製磁器碗を1 つ用い、それに土師器小皿か杯を組み合わせているものが多く、似たような特徴を持っている。そ の副葬品の中で注目されるのは、中国製磁器碗を持つものが多いことである。この遺物を持つとい うことは、地理的に当時の博多に近いことに起因するが、しかしどの墓にも副葬されたわけではな い。大野城市内では確認された6基中、3基は磁器碗を副葬していない。また大宰府史跡の調査で 確認された SX863木棺墓の棺上から白磁碗1 · 瓦器椀1 · 土師器小皿8 · 杯1 が出土し、棺内から 鉄刀1・銅銭1が出土しており、他の木棺墓・土壙墓に比べてかなりの格差があるように思える。 こうした副葬品の格差は、おそらくは階層的な差を示していると思われる。塚口遺跡の南東1.2km離 れたところには、中世の集落遺跡である薬師ノ森遺跡が調査されており、また今後の御笠川東岸域 の調査で中世の墓地資料が増えることが考えられ、詳細に関しては今後の課題としたい。

4. S J 02甕棺墓について

SJ02甕棺墓の甕棺の出土状態は特異であり、県内ではこのようなタイプの甕棺墓はほとんど確認別がない。1基のみ北九州市井手尾遺跡の10号甕棺墓の類例があり、ここで参照し、考察を加えたい。

井手尾遺跡は小倉南区石田に所在し、弥生時代前期後半~中期にかけての甕棺墓12基と土壙墓46 基がそれぞれ数基ずつに分かれて墓群を形成し、混在している遺跡である。10号甕棺墓は削平を大きく受け、墓壙・甕棺ともに大破しているが、墓壙は残りの状態から楕円形プランで、規模は長さ75cm、幅57cmで深さ12cmを測る。甕棺は単棺で、底部は欠損しているがSJ02甕棺と同様、甕本体が口縁部から底部付近にかけてタテ方向に半砕されている。墓壙にはその半截面、つまり土器の内面を下にして、遺体を覆い被せるようにほぼ水平に置かれていた。この甕棺は口径39.6cm、底径10.8cm、器高48.2cmを測る板付Ⅱb式併行の壺形土器である。底部は最初から打ち欠かれ欠損しており、このことから調査担当者は埋葬者に対する何か特別な意味合いを考察しつつも、破損により日常品として使用できなくなった壺を甕棺として転用したのではないかと推測している。

塚口遺跡のSJ02甕棺は、復元口径55.0cmを測るやや大型の甕であるが、底部を打ち欠いた欠損

の有無は不明である。甕の大きさからみると成人用に製作された甕棺であるが、墓壙の規模から判断すると小児用の墓である。おそらく成人用の甕棺として使用する前に何らかの形で甕が部分的に破損し、小児の遺体を覆い被せる棺蓋として転用したと考えられる。また両遺跡の甕棺は単独ではなく、甕棺墓群の中に営まれているという共通点を持ち、さらに遺体を覆い被せた状態を上から観察した時、その見た目は普通の甕棺墓と変わらない。このことからSJ02甕棺墓は、埋葬者に対する何か特別な意味合いを持ったものであると考えるよりも、特異な例ではあるが埋葬前に破損した成人用甕棺を半截し、小児用甕棺として用いた転用棺墓として考えた方がいいだろう。

- 註1 常松幹雄「甕棺の変遷と終焉」『弥生人のタイムカプセル』(1998) 福岡市博物館
- 註2 中島恒次郎「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究[2](1992)日本中世土器研究会
- 註3 山本信夫他『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』(2000)太宰府市教育委員会
- 註 4 橋口達也「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XXXI』(1979)福岡県教育委員会
- 註5 『弥生時代の墓制(1)』(2000) 埋蔵文化財研究会
- 註6 宮崎亮一他『馬場遺跡』太宰府市の文化財第44集(1999)太宰府市教育委員会
- 註7 『大宰府史跡-昭和52年度調査概報-』(1977) 九州歴史資料館
- 註8 木太久守『井手尾遺跡』(1987)(財)北九州市教育文化事業団

図 版



①調査区北半部全景(南西より)



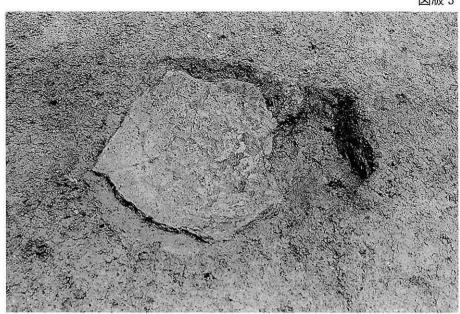
②調査区南半部全景(北東より)



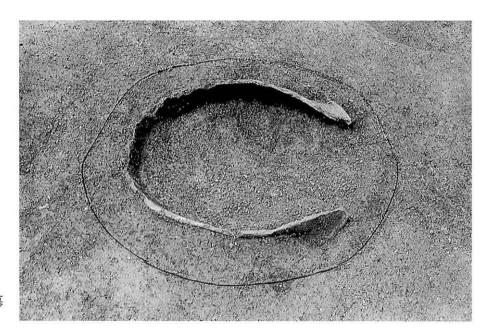
①調査区東側木棺墓・土壙墓群検出状況(北より)



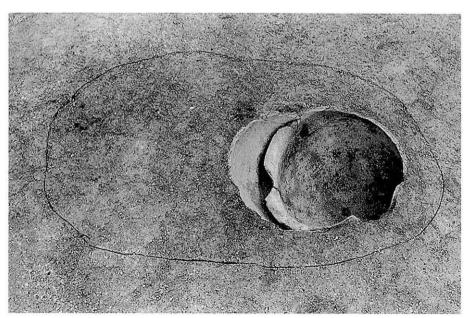
②調査区北側甕棺墓・木棺墓・土壙墓群検出状況(南西より)



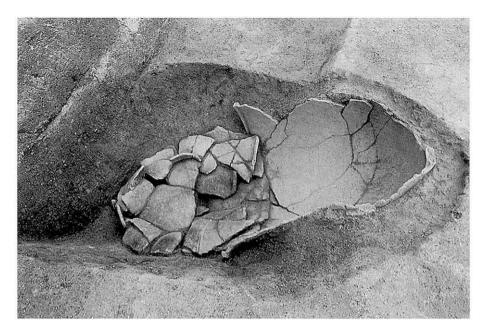
① S J 01甕棺墓 (南より)



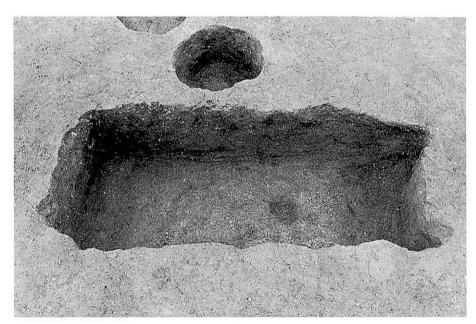
② S J 02甕棺墓 (北より)



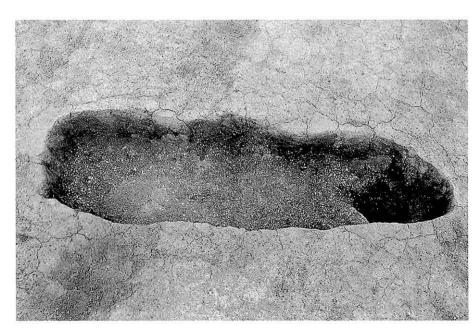
③ S J03甕棺墓 (南より)



① S J 04甕棺墓 (南西より)



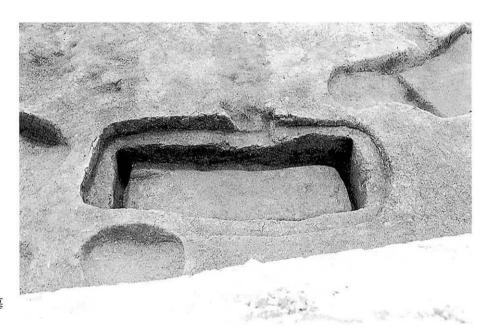
② S P 04木棺墓 (北より)



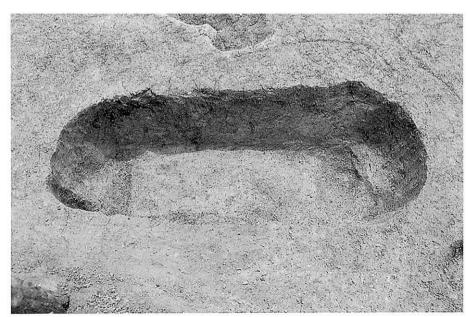
③ S P 08木棺墓 (南西より)



①SP09木棺墓 (南より)



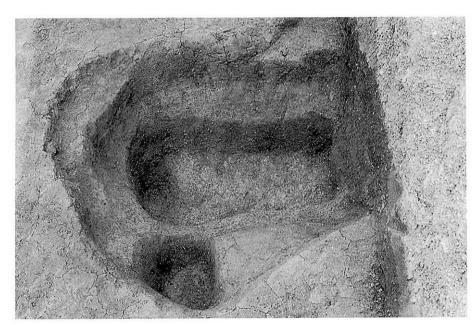
② S P 10木棺墓 (北東より)



③ S P 12木棺墓 (北東より)



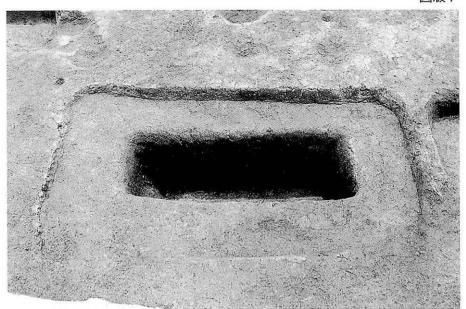
① S P 14木棺墓 (南西より)



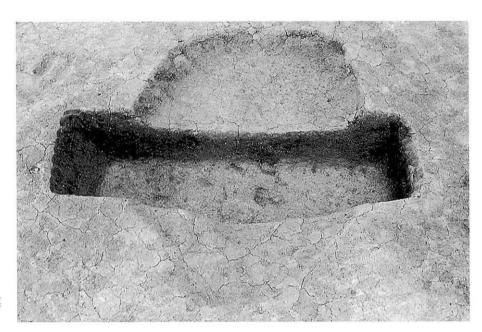
② S P 15木棺墓 (南西より)



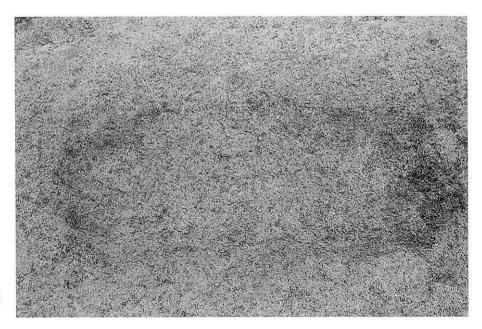
③ S P 05土壙墓 (西より)



① S P 11土壙墓 (北東より)



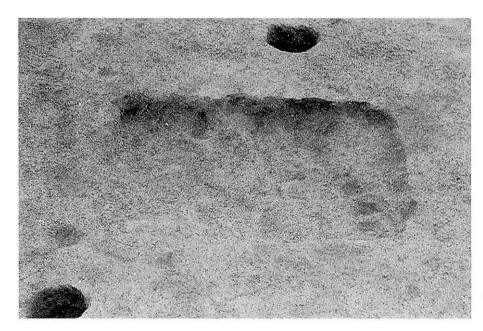
② S P 13土壙墓 (南西より)



③ S P 01土壙墓 (南より)



① S P 02土壙墓 (南東より)



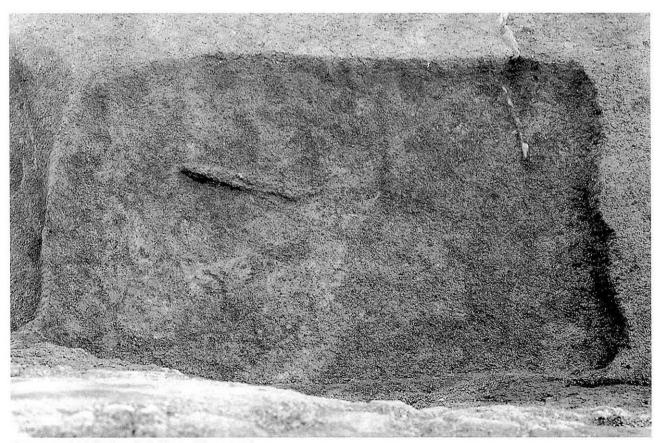
② S P 03土壙墓 (南東より)



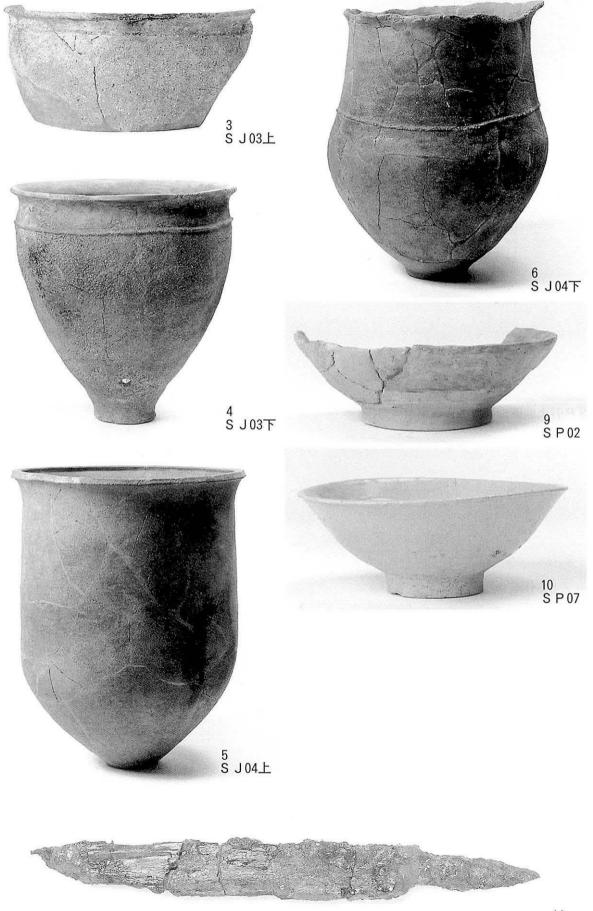
③ S P 06土壙墓 (北西より)



①SP07土壙墓白磁碗出土状況(南東より)



②SP07土壙墓鉄刀出土状況(北西より)



報告書抄録

[· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,												
ふりが	な	つかぐ	つかぐちいせき											
書	名	塚口遺	[口遺跡											
副書	名													
巻	次													
シリーズ	名	大野城	野城市文化財調査報告書											
シリーズ番	号	第58集		•										
編著者	名	松浦	智											
編集機	関	大野城	市教育委	員会										
所 在	坦	€816	-8510 花	畐岡県大 野	野坂	大市曙町	2丁目2番	计 1号						
発行年月	手 月 日 2002年3月31日													
ふりがな 所収遺跡名	ふりz 所在		コード	遺跡番号	北 緯		東 経。/ "	調査期間	調査面積		調・直	E 原	因	
かくち は ちょ な な な な は な 口 遺 跡	が福 が大 が御	城市			33°32′55″		130°28′55′	1988.5. 9	282 n	î ,				
所収遺跡名	種	名	主な	時 代	٤٧	主な	遺構	主な	遺物	特	記	事	項	
塚口遺跡	墓	地	弥 生	・中世	: 小 弥生土		4基 棺墓7基 壙墓3基 壙墓5基	弥生土器 須恵器 土師器 白磁 鉄刀	·					

大野城市文化財調査報告書

第58集

平成14年3月31日

発 行 大野城市教育委員会

福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 ㈱川島弘文社

福岡市東区箱崎ふ頭6-6-41